

第22回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和7年7月29日（火）

○会 場 清水町役場別館会議室

○出席者（委員）

- ・岩崎 清 悟 座 長（静岡ガス株式会社 元取締役会長）
- ・中山 勝 副座長（静岡産業大学特任教授 総合研究所所長）
- ・川村 結里子 委 員（株式会社結屋 代表取締役）
- ・木村 博彦 委 員（株式会社木村鋳造所 名誉会長）
- ・長倉 一正 委 員（有限会社長倉書店 代表取締役）
- ・三田 功 委 員（公益財団法人ふじのくに医療城下町推進機構 常務理事）
- ・矢嶋 敏朗 委 員（日本大学国際関係学部国際総合政策学科 教授）

議題：清水町流「地方創生2.0」を考える

- ・ 若者や女性にも選ばれる職場や暮らしの実現に向けて
- ・ 地域資源を活用した高付加価値産業の創出に向けて

■ 清水町らしさを生かす

- ・ 全ての自治体が、国の基本構想に掲げている方向を目指したら、どんな社会になるのか。もっと素直に取り組んだ方がいいのではないか。国の構想どおり、高付加価値産業をまちに作ることは、簡単にできる話ではない。むしろ、我々が感じている清水町のポテンシャルのようなものを頭の中に置きながら、人口減少社会、少子高齢化社会の進展で全体の人口が小さくなっていく中で、どんなまちになれば喜ばれるのか、いい街になるのか、といった発想で話したい。
- ・ 中学校3年生の孫に、大きくなったらどこに住みたいか聞いたところ、長泉町という答えだった。話を聞くと、コンサートで東京へ出かけることがあり、「清水町からは遠い」と言う。それでも、ショッピングセンターも近くにあり、富士山が見えるので、「なんとなくいいまち」というような受け止めのようだ。これがかなり一般的な清水町に対するイメージではないかと思う。

■ 学生の関心事は「交通手段」と「働き先」

- ・ 学生の目線では、清水町といえばサントムーン柿田川であり、土日に運行しているシャトルバスを使って遊びやアルバイトに行っているという状況だ。民間バスが東京行き的高速バスを運行しており、停留所の近くに住んでいる学生もいるが、この路線がサントムーンに停まれば、清水町に住む学生も現れるのではないかな。
- ・ 今年初めて、臼井国際産業株式会社に学生インターンシップを受け入れてもらった。こういった細かい取組を積み重ねていくと、5人、10人と、清水町に住む学生も増えていくのではないかな。

■ ファルマバレープロジェクトを生かす

- ・ 高付加価値産業は一朝一夕でできるものではない。県が取組も、あくまでも地域の資源があって、それを生かしていくという形で進めている。
- ・ ファルマバレープロジェクトは、もともと県東部地域に医療関係の企業が多く、20年にわたってそういった企業に参入してもらうことで広がってきている。
- ・ 今後は地域をもっと強くするということで、健康医療産業だけにとらわれずに、人手不足やD Xなどについても、いろいろな企業とのネットワークを生かして課題解決に貢献していきたい。
- ・ 清水町は、町域は狭いが平坦地が多い。交通インフラ、生活インフラ、安全性を生かせば長泉町に引けを取らない町にできるのではないかな。
- ・ 医療品の場合、買うのは病院などの医療機関が主である。今はどの病院も運営が苦しいところで、新たな製品を売るというのはハードルが高いが、がんセンターの医師等には、地域でいい製品を作っていることを知らしめてもらっている。介護福祉方面にも対象を広げており、広い裾野で地域の企業に参画してもらおうとしている。
- ・ 高齢者向け施設の住空間など、D Xを絡めた高齢化社会への対応に関しては、非常に高い付加価値を生む可能性を秘めている。がんセンターを核にしたファルマバレープロジェクトがあり、こういった分野についてさまざまな知見が蓄積されていることは大きな強みであり、利用しない手はない。長泉町だけではなく、

地域一帯をよい地域にしていこうというのが、ファルマバレーの元々の考え方である。

■ 卸団地を地方創生の起爆剤に

- ・ 卸団地を新たな変革を引き起こすための起爆剤として活用できないか。若者や女性の職場をつくるのか、研究開発で高付加価値を生み出す場にしていくのか、活用の仕方によって変わる可能性があると思う。
- ・ 現在、藤枝市では、第2ファルマバレーのイメージで、医療機関を中心に健康づくりに関する新たなクラスターを形成していこうという動きがある。市長がファルマバレーに来て話を聞くことをしている。お茶やその他の農業を含めて健康産業をどうしていくか、研究会を立ち上げている。ファルマバレーでは、企業同士のコラボレーションがまだ生まれていないことが課題となっている。そこからどのようにして新しい産業や事業を作るか、町の中でも活用できるものがある。清水町でも企業のコラボレーションを通じた「新結合」を試行錯誤してはどうか。
- ・ 企業同士のコラボレーションは町外の企業やスタートアップも含めて可能性があるのではないか。コラボレーションの場として卸団地の活用も考えられるのではないかな。

■ さまざまなくらしの場としてサントムーン柿田川を活用

- ・ 清水町にはサントムーン柿田川があると言っても、雇用の場としては物足りないかもしれない。商業に従事する人の年収はあまり高くなく、女性が結婚相手に求める所得水準に合わないケースもあり、女性や若者を惹きつける職場という面では、あまり貢献できていないかもしれない。しかし、女性や若者にとってショッピングセンターがあることは大変な魅力である。
- ・ 伊豆に比べれば清水町は天国のように感じる。三島駅まで車で10分かかるといえるが、10分程度の移動であれば、町に三島駅があると考えてよいくらいである。
- ・ 商業の場がもっと地域のくらしに踏み込んで、いろいろな場として活用されるといいのではないかな。高校生がチャレンジショップをやったり、ダンスをやっている人たちが練習の成果を披露できたり、こういった取組は施設側にとってもメリットがある。

- ・ サントムーン柿田川でイベントを開催すると、確かに結構な人が集まる。ただ、このような取組を施設任せにするのではなくて、町で企画を立てて、積極的に働きかけていくことが重要だと思う。
- ・ 名古屋や亀戸などは好例だ。どちらも地域の特色を出している。

■ 女性が活躍する職場づくり

- ・ 清水町といえばまずは面積が小さい。目立つ存在としてはサントムーン柿田川、卸団地、静岡医療センターである。この中で活性度が少し落ちてしまっているのが卸団地という認識だ。どのように活性化していくかは重要な点だ。
- ・ 「若者や女性にも選ばれる職場」という点が本日の議題の1つになっている。従来の鑄造業はまさに「3K」で、真っ先に嫌われる職場だったが、木村鑄造所がどんなことに取り組み、この状況をいかに突破してきたか、紹介する。

【木村鑄造所の女性が活躍する職場づくり】

<経緯>

- ◇ 1996年にフルモード鑄造法を導入し、以降、デジタル技術の進展に合わせて発泡模型の制作を手作りから段階的にNC加工へ移行した。製作工程の標準化、簡素化に合わせて女性が活躍できる職務を拡げ、採用を加速させていった。現在の女性比率は45%以上に至っている。

<効果>

- ◇ デジタル技術の進展とともに女性活躍の分野が拡大
- ◇ 高い適性を発揮する優秀な女性社員を輩出
- ◇ 3Kの払拭。女性が働きやすい職場環境への改善
- ◇ 女性視点での5S活動（職場の整理・整頓・清掃・清潔・躰を通じて、効率的で安全な作業環境を維持するための手法）の活発化
- ◇ 女性のチームリーダーの輩出 など

<女性支援のための諸制度の整備>

- ◇ 育児休業制度の拡充（小学校3年生の年度末まで延長可能）
- ◇ 不妊治療の休暇制度
- ◇ キャリアアップの整備 など

<今後の課題>

◇ 模型部門から鑄造部門への展開

◇ 女性管理者の育成

- ・ 鑄造業でありながらデジタル化を推し進め、あらゆる仕事が女性にできる仕事になった。今後は、女性の総合職を作って管理職を育てたいと考えている。
- ・ 労働者がいなくなってしまう点で、3 K産業にとって人口減少は脅威だ。
- ・ 少子高齢化で労働人口は減ってきている。どのようにすれば人手をかけずにできるか考えることは、高付加価値化につながっていく。

■ 誰をどうしたいのか、具体的にした上で粘り強く働きかける

- ・ 若者、女性という漠然とした捉え方ではなく、どのような女性や若者にどんな変化をもたらしたいのか、具体的にイメージして働きかけることが必要ではないか。
- ・ 県立裾野高校で、生徒たちと大人たちの20年後についての話し合いをコーディネートした。地元に戻ってきたときにどういう大人がいるのかというようなイメージが具体的にできれば、帰ってきたくるのではないか。
- ・ 若者、女性と言いながら、実は分断があるのではないか。女性に会議に参加してもらうためには、参加してもらいたい女性がどういう時間なら出席してもらえるのか、というところまで具体的にイメージしてセッティングする必要がある。聞きに行くという選択肢もあるかもしれない。
- ・ 誰の意識を変えていくにしても、時間と労力をかけて、何年もかけて取り組んでいく覚悟が重要だ。
- ・ 具体的にイメージするという意味では、清水町のコンパクトさが生かせるのではないか。

■ 「住みやすいまち」を突き詰める

- ・ 町民アンケートで、清水町に対する印象で最も多かったのは「住みやすいまち」であった。まずはこの自分たちの立ち位置をしっかりと認識する必要がある。清水

町を一番住みやすいまちにすべきだ。住みやすいとはどういうことなのかを真剣に考えることが重要だ。

- ・ 沼津市、三島市へのアクセスをどう考えるのか。これをなくして「住みやすさ」は実現できない。町には、交通体系の整備が求められているところ、町民の目に見えるものを打ち出していかなければならない。